

第15号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
  - ・リレーエッセイ  
政治教育における敵対性を再考する  
／ 浜田未貴(東京大学大学院教育学研究科修士課程)
  - ・実践事例紹介  
公害に向き合った市民の経験から学ぶ～あおぞら財団の教材開発の試み～  
／ 栗本知子(公益財団法人公害地域再生センター)  
：編集長の目 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
  - ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」  
「日本人の日本人による日本人のためのシティズンシップ教育」を超えて  
／ 松田ヒロ子(神戸学院大学現代社会学部准教授)  
シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？  
／ 橋崎頼子(奈良教育大学教育学部准教授)
  - ・連載「ヨーロッパの動きから考える」  
スウェーデンに学ぶ「若い政治」の作り方  
／ 両角達平(NPO 法人 Rights 理事)
  - ・推薦図書「教員に薦める5冊」  
／ 原田謙介(NPO 法人 YouthCreate 代表理事)

第16号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
  - ・リレーエッセイ  
嫌われる政治への関心を高めるにはどうするか  
／ 沼尾優希(京都大学大学院公共政策大学院, 京都大学主権者教育研究会)
  - ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」  
「わたしたち」とは誰かを問い直す視点  
／ 菊池かおり(筑波大学人間系助教)  
フランスのシティズンシップ教育  
／ 大津尚志(武庫川女子大学学校教育センター講師)  
人権の視点をくりこんだ市民教育を！  
／ 藤原孝章(同志社女子大学現代社会学部特任教授)
  - ・連載「ヨーロッパの動きから考える」  
スウェーデンの模擬選挙「学校選挙」が教える民主主義とは？  
－事務局直撃インタビュー①－  
／ 両角達平(文教大学生生活科学研究所研究員)



第17号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
  - ・リレーエッセイ  
地球温暖化とシティズンシップ  
／ 角野綾子(NPO 法人 JAE 教育コーディネーター)
  - ・実践事例紹介  
討論形式の授業の可能性－テキスト批評をベースにして－  
／ 橋本渉(東京大学教育学部附属中等教育学校教諭)  
：編集長の目 / 水山光春(青山学院大学教育人間科学部特任教授)
  - ・特集  
ソーシャルイノベーションにつながるシティズンシップ教育とは？  
／ 佐野淳也(同志社大学政策学部准教授)  
児童・生徒が学校づくりに参加する学校  
－ドイツの生徒参加を手がかりに考える、日本の学校が目ざすべきビジョン－  
／ 柳澤良明(香川大学教育学部教授)
  - ・連載「ヨーロッパの動きから考える」  
スウェーデンの模擬選挙「学校選挙」が教える民主主義とは？  
－事務局直撃インタビューその②－  
／ 両角達平(文教大学生生活科学研究所研究員)
  - ・推薦図書「教員に薦める5冊」  
／ 西野偉彦(松下政経塾研修局主任, 慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員)



第18号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
  - ・リレーエッセイ  
参画への関心を摘まない環境を学校から  
／ 栗本拓幸(慶應義塾大学総合政策学部, 一般社団法人生徒会活動支援協会)
  - ・実践事例紹介  
新科目「公共」を見据えた主権者教育の授業実践  
／ 大畑方人(都立高島高等学校教諭)  
：編集長の目 / 水山光春(青山学院大学教育人間科学部特任教授)  
那覇市繁多川公民館を市民の場とするために  
／ 南信乃介(特定非営利活動法人1万人井戸端会議代表理事,  
那覇市繁多川公民館館長)  
：編集長の目 / 水山光春(青山学院大学教育人間科学部特任教授)
  - ・連載「ヨーロッパの動きから考える」  
スウェーデンの学校教育が考える「シティズンシップ」とは？  
／ 両角達平(文教大学生生活科学研究所研究員)
  - ・推薦図書「NPO スタッフに薦める5冊」  
／ 土肥潤也(NPO 法人わかものまのま代表理事)

第19号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
  - ・リレーエッセイ  
「子どもの声」から生まれる学び  
／ 久保園梓(筑波大学大学院)
  - ・実践事例紹介  
高等教育におけるシティズンシップ教育の可能性  
－東海大学パブリック・アチーブメント型教育の取り組みから－  
／ 堀本麻由子(東洋大学文学部教育学科准教授)  
：編集長の目 / 水山光春(京都橘大学国際英語学部教授)
  - ・セミナーレポート「J-CEF TOKYO スタディ・スタヂオ」

- 02 リレーエッセイ  
想いを声に、行動に。  
／ 山本大貴(都立西高等学校・Climate Live Japan 共同代表)
- 03 実践事例紹介  
今の課題に向き合い、未来をよりよく生きる力を育てる  
「マイタウンミーティング～みんなが幸せにくらせるまちをつくろう～」  
そして、「バリアフリープロジェクト～わたしたちがつくる未来～」へ  
／ 中井 貴彦(高槻市立富田小学校)
- 06 特集  
シティズンシップ教育を促進させるのに何が重要となるべきか？  
／ イアン・デービス(英国ヨーク大学教育学科)
- 10 座談会  
日本におけるシティズンシップ教育の次のチャレンジは何か？  
～J-CEF 設立から7年間の変化を手がかりに～  
〈パネリスト〉 唐木清志さん(筑波大学, J-CEF 運営委員) / 川口広美さん(広島大学, J-CEF 副代表) / 小玉重夫さん(東京大学, J-CEF アドバイザー) / 土肥潤也さん(NPO 法人わかものまのま, J-CEF 運営委員) / 古野香織さん(東京学芸大学大学院, J-CEF 副代表)  
〈コーディネーター〉 古田雄一さん(大阪国際大学短期大学部, J-CEF 代表) / 水山光春さん(京都橘大学, J-CEF アドバイザー)  
〈事務局〉 川中大輔(龍谷大学・シティズンシップ共育企画, J-CEF 運営委員・事務局長)
- 16 会員の最新図書
- 17 終刊のあいさつ
- 17 『J-CEF NEWS』バックナンバー目次







## 想いを声に、行動に。



都立西高等学校・  
Climate Live Japan 共同代表  
山本 大貴

気候危機は、これから何十年もかけて戦っていくことになる現代社会最大の危機。

……私がそう思うようになったのは、コロナがきっかけであった。どんどん社会が変わっていく姿を、どうしても他人事とすることができなかつた自分がいた。それまで「普通の」高校生であった私は、「私が学校で学ぶ全てをもってしても社会の本当の姿を理解することはできないんだ」という不安感に襲われたのである。同時にこれまでずっと募らしてきた社会への不信感・社会問題への危機感が爆発したのである。そして私が取り組む決意をしたのは、気候危機だった。

「社会問題解決の一部になりたい」という想いが、現在の私を支えている。気候危機が示唆する残酷な未来は絶対に現実にはならない。取り返しのつかなくなる時が来る前に、止めなくてはならない。

しかしこの問題の難しいのは、1つの絶対悪が引き起こしているわけではないことにある。社会の様々な欠陥部分が分野を超えて

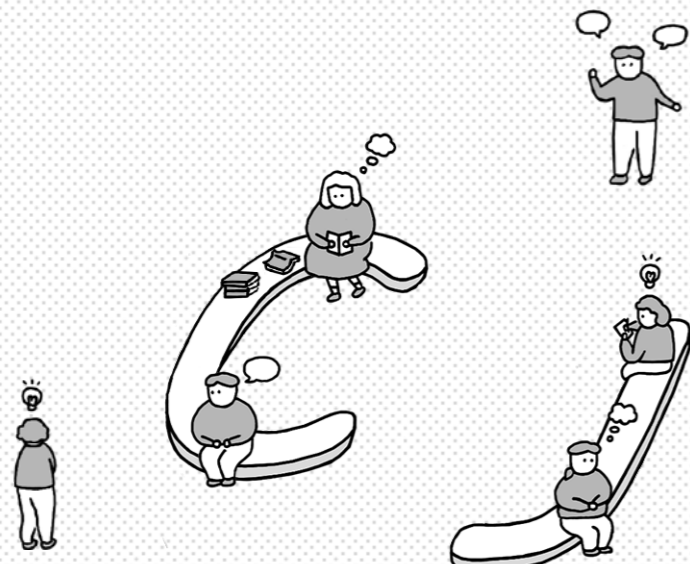
複雑に絡み合い、結果としてだれも望まない未来を生み出そうとしてしまっているのだからと私は思っている。これから先に必要なのは、「分野」、もっと言えば「職種」それぞれの立場から利害を考えるのではなく、「社会全体の運動」に重きを置いた社会システムだと思う。そして誰も苦しまないのではないだろうか。そして本当の意味で社会に貢献する人が大切にされるべきだ。ここで必要なのはシステムチェンジである。

このように考察し、行動していく中で感じることがある。何か意見があっても、それを言葉にし、行動にする人があまりにも少ないことだ。全ては行動から始まると私は思っている。私が募らせてきた想いは、こうして行動となって初めて意味を持ったのである。それはとても小さな一歩の積み重ねであった。奇跡に近かったのかもしれない。私にはコロナというきっかけがあった。だがきっかけなど無くとも、想いを言葉や行動に変えることが当たり前環境こそ、より良い未来を生み

出すのではないか。

どうしたらそんな社会は実現するのだろうか。残念ながら、私にその答えはまだ見えていない。ここで私はあえて、日本と海外の世論形態や人々の性格を比較する恒例の議論は避ける。私は、国境を越えた地球市民としての世論が大切だと思っているからだ。地球市民は自分たちの住む地球のことをよく知り、よく考えなければならない。それは社会生活を営む上での最低限のマナーですらあると考える。「地球のことを知る」とは、単に科学的視点から地球環境を理解するのではなく、私たちの置かれている社会を最も広い範囲で知るということである。今この瞬間にどこの誰が何をしているのか、そのことと私は決して無関係ではないのである。閉鎖された、1つの同じ星に生きる同じ人間だ。

そういった視点が、あなたの想いを声や行動に変える1つのヒントになるかもしれない。私たちの声、行動に、国境はない。



## 今の課題に向き合い、 未来をよりよく生きる力を育てる

「マイタウンミーティング～みんなが幸せにくらせるまちをつくらう～」  
そして、「バリアフリープロジェクト～わたしたちがつくる未来～」へ



高槻市立富田小学校教諭  
中井 貴彦

### 1. はじめに

本校は学制発布の翌年に創立し、今年で147年目を迎える学校である。一時期は1200名を超える児童を擁したこともあったが、学校分離に伴う校区変更を重ね、そして何より昨今の少子化の影響を受けて、現在児童数は200名ほどの、各学年、単学級の小規模校となっている。歴史のある寺社や造り酒屋が立ち並ぶ風情のある昔からのまち並みを残す地域にある。一方で、隣接する赤大路小学校は、校区に新しいマンションが立ち並び、今も子どもたちの人数が増え続けている。これら2校の子どもたちが進学するのが高槻市立第四中学校であり、この3校で第四中学校区(ゆめみらい学園)として、1980年代から30年来、子どもたちの0歳から18歳の育ちを小中、そして保幼、高校、地域も含めて連携・協働した進路保障の取り組みを行ってきた経緯がある。教育機関や地域が子どもたちを中心に連携・協働できる関係こそが校区の宝であり、この宝があるからこそ、子どもたちと社会とのつながりを意識したカリキュラムを作成することができる。

### 2. 生活科・総合的な学習の時間「いとみらい」

2010年度に文部科学省研究開発学校の指定を受け、新領域「いとみらい科」の研究・実践を行ってきた。(現在、生活科・総合的

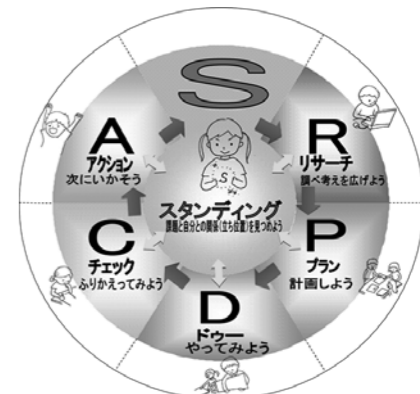
な学習の時間「いとみらい」)大切にしていることは、子どもたちの実態・課題をとらえ、その課題を解決することであり、子どもたちに「幸せになってほしい」という願いが校区の研究の原点である。過去、「なんで、こんな(勉強)しなあかんの?」「どうせ、意味ないし」などの言葉に表れているように、学びと自分の生きる力、そして社会や未来とつながっていることが実感できないという課題が校区にはあった。だからこそ、「いとみらい」の取組には、子どもたち一人ひとりとその子らしく、自分と周りを幸せにしながら、自分の未来を切り拓いていく力をつけたいと取り組みを進めている。そのため、子どもたちにとって身近な社会である「家庭」や「学校」、自分の住む「地域」や「社会」の「温度計をあげる。ために、それぞれに横たわる課題を見出し、その解決に向けて自分たちができることは何かを考えたり、もっと魅力ある社会にしていこうためにはどんなことができるかなど、社会に「働きかける。こと」によって「社会参画力」の育成をめざしている。ここでいう「社会参画力」とは、子どもたちの実態をふまえて考えた、校区で育みたい力のことである。「矛盾や困難を乗り越えじりつして生きていく力」「社会の中から課題をとらえ解決する力」「人や社会に働きかける力」「学ぶ意味をとらえ学んだことを社会にいかす力」の4つからなる。

単元を計画するにあたり、社会参画の場の保障を大切にしている。地域とともに実践的・体験的な活動を進めることで、学びが自分事となり、学習意欲の向上、達成感や自信を得ることができる。

### 3. 課題解決に向けた学習サイクル「S-RPDCA」

校区の子どもたちの課題として、困難をはじめて出会うことに対して、乗り越え方が分からずに投げ出してしまふなどの姿があった。それを解決していくためにも、「学び方」自体を習得する学習方法が必要だと考え、子どもが学習を通して「生き方」を考えられるように、「学ぶ過程」にこだわり、開発したのが、子ども自身が課題解決方法を身につける「S-RPDCA」学習サイクルである。子どもたちの実態から「S」と「R」こそ重要だと考えている。自分と関係がないと思うと他人ごとになってしまう。自分事とならない課題には、課題解決の意欲は生まれにくい。「S」とは、テーマと自分はどう関係(自分の立ち位置)しているのかを見つめ、課題意識を深め、問い続けることである。校区では、この「S」を「スタンディング」と呼び重要視している。また、身近な狭い世界における情報で判断するのではなく、広い世界と出会い、視野を広げ、多様な考え方に会おう中で解決方法を選択できるようになってほしいと調べ、考えを広げる「R」「リサーチ」を設定している。

		ステップ1	ステップ2	ステップ3
予盾や困難を乗り越え、じりつして生きていく力	じりつ力	自分で決めて行動しようとする	状況を踏まえて、自分で決めて行動しようとする	状況に決まらず、自分で決めて行動しようとする
	推進力	物事に楽しんで取り組もうとする	難しそうでも取り組もうとする	自分のできることを見つけて取り組もうとする
	持続力	うまくいかない時でも、投げ出さずに取り組む	困難であっても、最後まであきらめずに取り組み続ける	解決が困難だと思われることに対しても、乗り越えようとするほどに強くなり取り組む
社会の中から課題をとらえ解決する力	環境設定力	自分が何をすべきか理解できる	課題を解決するための方法を考える	よりよい課題解決の方法を選択できる
	実行力	計画にそって取り組む	よりよい解決のために計画的に取り組む	より効率的に課題解決に取り組む
	ふり返り力	取り組んだことをふり返る	取り組んだことをふり返り、学びを整理する	学んだことやわかったことを検証し、言語化する
人や社会に働きかける力	コミュニケーション力	相手を意識して、聴いたり話したりする	ちがう意見の人の考えを大切にして、聴いたり話したりする	多様な立場や考えを尊重して、聴いたり伝えたりする
	協働力	友だちと力を合わせて取り組む	自分の周りにいるいろいろな人と協力する	自分の関わる社会の範囲を広げ、さまざまな人と協働する
	発信力	自分の考えや学んだことを、ていねいに伝える	自分の考えや学んだことを、わかりやすくよりよい方法で発信する	自分の考えや学んだことを、適切で効果的な方法を用いて発信する
学ぶ意味をとらえ学んだことを社会にいかす力	みらい力	取り組んだことの意味を感じられる	取り組んだことを自分の生活にいかす	取り組んだことの意味を感じ、自分たちの「みらい」にいかす





今の課題に向き合い、未来をよりよく生きる力を育てる

「マイトウンミーティング～みんなが幸せにくらせるまちをつくろう～」  
そして、「バリアフリープロジェクト～わたしたちがつくる未来～」へ

4. マイトウンミーティング～みんなが幸せにくらせるまちをつくろう～(2019年度)

富田のまちには、地域で活動する方々を中心にしながら、社会的孤立を越え、インクルーシブコミュニティを創造しようとする動きがある。2年前、富田のまちは大阪北部地震により大きな被害を受けた。子どもたちの中でも大きかったのが富寿栄住宅の12棟13棟の建て替えという事実である。当単元の具体的な取組とは、高槻市を中心とした、今後のコミュニティ再生プログラムの過程において、子どもたちが考える「みんなが幸せにくらせるまちづくり」の提案を、少しでも反映させたいという願いを実現することにある。そのために必要だったのが「マイトウンミーティング」である。高槻市の土地創造部をはじめとした市の職員や富田のまちに住む方々、そして富田のまちで働く方々を招待し、これからの富田のまちづくりについて考えるため、子どもたちと地域の方々との話し合いの場を設定することである。「みんなが幸せにくらせるまちづくり」をするために、4年生の自分たちができることは、富田のことを一番知っている富田博士として、たくさんの方々の声や知恵を紡いでいくこと

である。地域の方々との協力によるリサーチを経て、子どもたちの考えた「共生」のまちづくり。そのまちづくりに参画することで「社会は変えられる」という「手触り」のようなものを感じさせたいと願い取り組んだ。

Sでは、3年生で行った「きらめきスポットプロデュース」をプレインストームングで思い起こすところからスタートさせた。「本当に誰にとっても住みよいまちになっているのか？」という疑問をもたせ、行ったまち探検。子どもたちには課題がはっきりと映っていた。「みんなが幸せにくらせるまちづくり」のためにまずは自分たちが動こうと取り組みがスタートをしていく。Rでは、富田に住む人、まちづくりに関わる人、まちで働く人など、とにかくたくさんの方々との出会い、まちに対する思いや課題、そして願い、期待を聞いた。Pでは、それらの思いをもとに「大人だからできること」「自分たちができること」「すぐできること」「時間がかかること」を縦軸と横軸にして、Rの情報を根拠にとにかく意見を出し合い、一枚の模造紙にまとめた。見えた課題と解決方法など、子どもたちの学びや考えてきたこと、まちづくりに対する思いとともに「提案書」としてまとめ、高

槻市都市創造部の職員に手渡すこともできた。それは、「たくさん考えてきたけど、子どもだけの力ではどうしようもないことがある。おとなの力を借りたい」という願いからの取り組みである。そして、何よりも「まちの方々と一緒にまちづくりをしたい!」という強い願いから「マイトウンミーティング」は当日を迎える。子どもたち33名に地域の方々、PTA、企業、市職、有識者など実に40名に至る参加があった。司会の子どもが会を進行させていく。第一部では、これまでの学びを提案として聴いてもらい、第二部では、マイトウンミーティングとして町に対する想いを交流しあった。第三部では、まちの方々の感想、そしてダイバーシティ研究所田村先生よりこの会の講評をもらった。その後、CAでは、これまでの学びから自分たちにできることを模索して行動していく。「グリーンキャンペーン」「あいさつ週間(習慣)」そして「認知症サポーター講座」である。子どもたちは「困っている人と関わってどうしたらいいの?」という疑問からである。包括支援センターの協力で子どもたちは、高齢者の方との関わりを学ぶ中で、人との接し方を学んでいった。

**S みんなが幸せ**  
「みんなが幸せにくらせるまちづくり」の提案を、少しでも反映させたいという願いを実現することにある。

**R 富田に住むたく**  
「困っている人と関わってどうしたらいいの?」という疑問からである。

**「マイトウンミーティング」の取り組みの様子**

**P 自分たちができる**  
「困っている人と関わってどうしたらいいの?」という疑問からである。

今の課題に向き合い、未来をよりよく生きる力を育てる

「マイトウンミーティング～みんなが幸せにくらせるまちをつくろう～」  
そして、「バリアフリープロジェクト～わたしたちがつくる未来～」へ

5. バリアフリープロジェクト～わたしたちがつくる未来～(2020年度)

「社会的包摂」とは、社会に参加する保障のことである。社会に参加するハードル、あるいはバリアがある人たちに対して、そのハードルやバリアをなくしていくような社会へのアプローチが必要であると考えている。富田のまちには「ひとりぼっちをつくらないまちづくり」をめざして、取り組みを進めている方々がいる。制度の中で保障からあふれてしまった人たちにクローズアップし、社会保障に少しでもアクセスできるよう取り組みを進めている。そして、このパンデミックの最中、社会的排除を受ける状態の人たちが増え続けていることが問題の背景にはある。では、アフターコロナの社会とは「どのような社会をめざすべきなのか」をテーマにしながら、事実から子どもたちとともに考えていきたい。昨年、4年生のいまとみらいの取り組みでは、「マイトウンミーティング～みんなが幸せにくらせるまちをつくろう～」に取り組んだ。自らまちを歩き、様々な人の立場から物事を見つめなおし、「どうしたらみんなが幸せにくらせるのか」をまちの方々と一緒に話し合うことができた。単元の終局、C(チェック)において、ある子どもはこのようにふり返りを書いている「私はクラスで起こる問題を「何でこの人こうせえへんかったん? こうしたらいいのに…」などと、人に任せきりでした。でも、勉強してきて「じゃあ、あの人が無理なら、自分がしたらいいやん。」と、考えられるようになりました。きっと社会は一人ひとりが責任や役割などを

もって生活しているからこそ、できる社会なんだと思います。だから、私は自分のできることをしてこれからの社会を変えていきたいです。」このふり返りが次のA、そして今年度の「バリアフリープロジェクト～わたしたちがつくる未来～」のSとなっていく。「バリアフリープロジェクト」では、様々な場面で不利益を被っている、社会に置き去りにされがちな人たちにとって、今の社会は生きやすい仕組みになっているのかを問いたい。特に新型コロナウイルスによるパンデミックは、私たちの日常を、そして社会を大きく変えてしまった。その中で見えたことはリスクの偏りである。この間に起きていることを整理し、事実から社会の不寛容な側面を知ること、「だれ一人取り残さない」、様々な人たちが自分らしくくらしつづける社会の実現をこの単元でめざしたいという強い「S」を子どもたちに根付かせていきたい。何よりも、単元を通して自分自身の生き方を見つめなおし、知らず知らずのうちに心につけてしまっているバリアに気づき、取り除いていけるような取り組みを創りたいと考える。そのためには、多くの出会いを設定し、多岐にわたる価値観や知識を子どもたちには吸収してほしいと願っている。今単元は、「学校の温度計をあげよう」と「社会の温度計をあげよう」とも、1つの共通した単元で構成されている。テーマはともに「バリアフリープロジェクト」である。学級を創ることは、そのまま社会を創ることに投影される。つまり、身近な社会である「学級」に横たわるバリアをなくしていく取り組みは、当然、社会

に置き換えても同じことである。最後は、単元を通して考えたこと、学んだこと、考えた生き方から、改めて自分自身の行動目標を設定し、「わたしたちがつくる未来、～私の決意」を作成したい。

Sでは、コロナ休校中の自分たちの気持ちを視覚化し、整理するところから始めた。使用したのは大人教「いまだんなきもち」のイラストである。当時、「コロナにかかるかも…」「何で学校にいけないの?」それぞれに不安な気持ちやいらだち、ストレスを抱えていた。それをみんなで共有することで、分かり合い、客観視し、そして納得、整理していった。気持ちや情報を整理することで見えてきたもう一つの側面は、社会の不寛容である。そしてその不寛容はしんどい立場にある人ほど厳しい。そのような現実を知り、強くしたのが「バリア(不寛容)を取り払いたい!」という気持ちである。「私はみんなが幸せに暮らせる社会がいいです。どんな幸せかというと、一人ひとりが工夫して創っていく社会なら、出来上がったときに幸せです。一人ひとりが相手のもちあじをわかり合いつつ、一人ひとりが相手の気持ちを考えて行動できたら笑顔で楽しめて、喜び合えるまちにできると思います。」という思いをもっと広い世界の知見から広げ、考えてほしいと現在、地域との協働により、出会いと学びをつづけている。「地域でまちづくりに携わる方」「外国にルーツをもつ方」「障がいをもった子どもの保護者」「全国の子ども食堂を支援する方」「地域の老人福祉センター」「LGBTQについて」「SDGsを学ぶ4年生」「地域福祉課」などたくさんの方々や教材との出会いがあった。コロナ禍の中、直接が難しい方とはZoomやアンケートなどを使いコミュニケーションをとっている。今後、単元はPに進んでいく。多くの価値観に触れた子どもたちはどのような社会への参画を見せてくれるのか楽しみにしている。

中井 貴彦  
(tonda@takatsuki-osk.ed.jp)

◆参考文献  
-論文「子ども食堂なぜ求められているのか」湯浅誠氏(NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長)

**S スタンディング パンデミック**  
「みんなが幸せにくらせるまちづくり」の提案を、少しでも反映させたいという願いを実現することにある。

**R 「今の社会」のこ**  
「困っている人と関わってどうしたらいいの?」という疑問からである。

**「マイトウンミーティング」の取り組みの様子**

**P 自分たちができる**  
「困っている人と関わってどうしたらいいの?」という疑問からである。





英国ヨーク大学教育学科  
イアン・デービス

## シティズンシップ教育を促進させるのに 何が重要となるべきか？

日本シティズンシップ教育フォーラムのニュースレター、第20号記念号に貢献できることは光栄です。シティズンシップ教育がこれほどまでに必要とされている時期はこれまで一度もありませんでしたし、素晴らしい日本シティズンシップ教育フォーラムの活動にできる限りの支援を提供できることを、私は誇りに思います。

### シティズンシップ教育を促進するための五つの重要な鍵となる方法

シティズンシップ教育を促進するために行動を起こすことができる五つの領域を、以下に示します。また、折に触れて、そのために何ができるかについての具体的な提案を強調したいと思います。しかし、もちろん、開放的で民主的な議論の価値を認めるのがシティズンシップ教育の精神ですから、以下に示すことがら、読者にとってもっと熟慮すべき領域として読まれるでしょうし、読者の方々も、何がなされるべきかについての独自の見解をお持ちでしょう。

### -シティズンシップ教育の明確で基本的な特徴

シティズンシップ教育は論争的であり、ある人々にとって確実であると思われることが、すべての人に受け入れられているわけではありません。このように多様性が正しく評価されている流動的な状況では、シティズンシップ教育が意味すると私が考えるものの特徴の簡単な要約を試みる必要があります。概括的には、それは政治的コミュニティ（通常は国）の正式なメンバーシップを意味し、そして非常に重要なことに、参加と密接に結びついているアイデンティティを意味します。しかし、このように単純化して述べることは危険も伴います。シティズンシップは、排他的な概念および実践として見られ、使用される場合があります。言い換えれば、市民を特定することで逆に、誰が（コミュニティに）属していないかを知ることが

できます。この排他的な可能性は非常に問題です。もちろん、政治的コミュニティのメンバーシップに伴う法的強制力のある権利と責任を特定することには利点がありますが、他者を排除することのマイナスの可能性を認識する必要があります。その負の可能性は、情緒的な問題を考慮に入れることによって軽減される可能性があります。シティズンシップの本質的な部分であるアイデンティティは、私（わたくし）と公（おおやけ）、ローカル・ナショナル・トランスナショナル・グローバルの間にある交わり、そして、ジェンダーや性、民族や社会階級の決定的な重要性を認識することを可能にします。また、シティズンシップに内在する、創造的で肯定的な（その他の）要素間の緊張を見て取ることができます。それは、一つの単純な定義を見つけないことではなく、シティズンシップの本質的なアイデア、問題、およびプロセスを認識することです。参加に向けた意欲はシティズンシップの基本ですが、このことは、他の人と同程度には参加しない人が、どこか市民として劣っているという意味ではありません。権利を獲得することと、そのために責任を果たすことの間には単純なトレードオフがあるという暗示は、民主主義社会にとって有害です。それは、現代社会にあって、生活上、一つかそれ以上の側面で不利な立場にあるすべての人々が、排除にさらされることを意味するからです。

また、シティズンシップ教育の性質と目的は明確に特徴づけられる必要があります。そのことは、単に「最良の」アプローチを特定するというだけの問題ではありません。と言うよりそれは、私たちがグループと同様に個人に焦点を合わせているか、コミュニティへの関与を探索しているか、そしてどのような核心となる価値が実践されているかについての検討を促します。新自由主義の視点から生まれる教育は、市民共和主義や共同体主義の視点を強調する教育とは大きく異なっ

ています。

私の提案は、シティズンシップ教育はもっぱら、人々が現代社会を理解し、社会正義の達成の可能性を強める方法で働く能力、つまりスキルと志向を発達させるのを助けるといったものです。社会正義のそのバージョンは、最大多数の最大幸福を目標とするベンサム流功利主義に基づくものではありません。また、自由至上主義的であったり、社会の外に立って判断することを可能とする、理論的に知的なロールズ流の無知のヴェールを価値づける、自由を基礎を置くアプローチに基づくものでもありません。というよりはむしろ、何が価値を持っているのかを特定する必要こそがあります。私たちは、何が正しいのかを反省的に探求し、受け入れることができるフレームワークを検討する必要があるのです。

### -「場所」に関する明確さ

私たちは、誰が誰のためにシティズンシップ教育を行っているのかを明確にする必要があります。場所だけでなく、さまざまな文脈に関連づけられるアイデアや実践を明確にする必要があることを強調するために、私は「場所」という単語に括弧を付けました。学校は明らかに、専門的な形での教育が行われる可能性のある主要な場所です。しかし、（ローカル、ナショナル、グローバルな）コミュニティも非常に重要です。そして、コミュニティや学校へのこれらの言及は、人々が教育を受ける資格があるとみなされる年齢についての疑問を提起します。私自身の立場は、幼い人にも年老いた人にも、公式にも非公式にも教育したり、また、私がこれまで言及してきた、地位やアイデンティティや活動といった視点を含むシティズンシップのさまざまな特徴を超えて、活動することは可能であるというものです。もちろんこのことは、私と公、専門家と個人、そして学校と地域社会の間の境界が現実にはあるので、非常

## シティズンシップ教育を促進させるのに何が重要となるべきか？

に大きな挑戦です。教師が、すでに非常に厳しいスケジュールに追加して、若者や地域の労働者によって現在担われている種類の仕事に貢献することは、まったく容易ではありません。しかし、学級内での政治システムに関する情報の提供に、ごくわずかな期間しか与えられない国々の状況を乗り越えることは可能であると強く信じています。いや、もっと多くのことができるでしょう。

### -概念に基づくシティズンシップ・カリキュラム

シティズンシップ教育のカリキュラムを開発する際には、概念フレームワークを強調することが重要だと思います。大まかに言って、フレームワークには二つの要素が必要です。第一に、権力、権威、正義、権利、責任などの実質的な概念に注意を払う必要があります。そのようにして、教師はシティズンシップの基本的な性質に焦点化することができます。第二に、手続的な概念に注意を払う必要があります。これらは本質的に、例えば、真実の尊重、証拠の厳密な使用、寛容の理解と実証を含む、学習が起こる方法を示しています。カリキュラムを実現するための教育学的事項については、次のセクションで詳しく説明します。しかし、概念フレームワークそれ自体は、カリキュラムに焦点を合わせています。この概念フレームワークを強調する際に、構成主義的アプローチを確保することの重要性も強調したいと思います。教師は尊敬される専門家です。彼らは本質的な知識とスキルを持っています。しかし、彼らは、学生と協力して知識を生み出します。これは、概念フレームワーク内での関与の提案であり、教師と生徒のグループ間およびグループ内での焦点の定まらない議論を奨励するものではありません。

### -シティズンシップのための教育学

これまで述べてきたカリキュラムの概念フレームワークを発展させるには、直接かつ個別に、また他の方法でも現代の問題に焦点を当て、積極的な方法で行うことが不

可欠です。もちろん、現代を理解するために、歴史的およびその他の視点が必要になることがあります。おそらく、シティズンシップ教育を、学校全体やコミュニティを含むさまざまな学校の科目や文脈（上記のように）で、開発する余地があるかもしれません。しかし、シティズンシップを個別の教科として教えることが、生徒に教育活動の性質と目的をすぐに理解させることのできる教師の専門性を高めることを示唆する、多くの研究と調査のエビデンスがあります。憲法や制度に関する情報を教師から生徒に伝えるだけでは十分ではありません。より打たれ強く、野心的で、献身的であれと言われている個人に道徳的なメッセージを伝えるだけでは十分ではありません。現在、物議を醸している問題に焦点を当て、議論を奨励するだけでも十分ではありません。むしろ、上で概説したカリキュラムの概念フレームワークを大切にすることが、約束された仕事を理解し、促進し、実践するという文脈での強力な知識を積極的に検討することを可能にします。そして、その作業を省察することが不可欠です。評価（テストではない）と価値付け（研究の形で）は不必要な贅沢ではありません。それらは、人々が何を理解し、何ができるかを知ることが可能にし、知的な方法で教育活動を発展させるのに役立つ重要な要素です。このようにして、生徒はシティズンシップについて、シティズンシップを通して、そしてシティズンシップのために学ぶのです。

### -シティズンシップ教育の発展への支援

シティズンシップ教育者は、非常に重要であると広く受け入れられている理念的な問題と実践を扱います。教育の基本的な目的を、人々が現代の民主主義社会を理解し、関与するのを助けることであると見なさない人はほとんどいません。しかしながら残念なことに、この高い重要性の認識は、学校でのシティズンシップ教育のステータスが低いという現実と対応しています。シティズンシップ教育が高い地位を持つことは極めて重要です。これには、教育関係者が達成する

のに非常に難しいいくつかのことが含まれています。シティズンシップ教育者が良い仕事をする本当のチャンスを得るには、政治家の認識と政治プロセスを大幅に強化する必要があります。しかし、できることもたくさんあります。政府や国際機関はすでにシティズンシップ教育の価値を認識しています。明確で専門的なシティズンシップ教育の具体的な価値について、政策の声明がより明確になれば、多くのことが達成される可能性があります。シティズンシップ教育が組織される方法は、個々の国々の手順や取り決め非常に強く依存しますが、極めて重要な国際的要素もあります。国境内および国境を越えた協力は不可欠です。何ができるかを知らせ、示唆するための研究が必要です。研究、政策、教育実践の関係は非常に複雑ですが、単純に言って、何ができるかを（単純に決定するのではなく）知らせる確かな知識の基礎があることを確認する必要があります。専門家の協会は、教育者のコミュニティを形成し強化する上で、重要な役割を果たします。協会は、モラル面でのサポートとともに、教育、学習、評価、評価のための実践的な手引きを提供することができます。

### -結論

私は、上に述べた五つの領域が、シティズンシップ教育を促進するために何ができるかという質問に対する単純で直接的な「答え」を提供すると、示唆したくはありません。この領域はあまりに複雑であり、そのために論争されています。けれども私は、教師、学者、その他多くの人々によって日本の国内外で行われている非常に優れた仕事をしっかりと受けとめるという文脈において、人々がより良い世界を作るために、理解し参加するのを助ける教育を前進させる継続的な関与に、私が必要と考えることを、述べさせていただきます。

（訳：水山光春／京都橋大学）

イアン・デービス  
(ian.davies@york.ac.uk)





Department of Education,  
University of York, UK  
Ian Davies

## What should be important in promoting citizenship education?

It is an honour to contribute to the commemorative 20th issue of the newsletter of the Japan Citizenship Education Forum.

There has never been a time when citizenship education is so obviously necessary and I am proud to offer any support I can to the excellent Japan Citizenship Education Forum.

### Five key ways to promote citizenship education

I show below five areas in which action could be taken to promote citizenship education. At times I highlight specific suggestions for what could be done. But, of course, in the spirit of a form of citizenship education that recognises the value of inclusive democratic debate, what is shown below may be read as areas for consideration and others will have their own views about exactly what should be done.

#### - A Clear and Fundamental Characterisation of Citizenship Education

Citizenship education is contested. The certainty that some have is not accepted by all. In this dynamic situation in which diversity is, rightly, valued it is necessary for me to attempt a brief summary of the nature of what I think citizenship education means. Broadly, it signifies formal membership of a political community (usually a country) and, very importantly, it signifies an identity which is closely tied to participation. There is a danger in stating things so briefly. Citizenship may be seen and used by some as an exclusive concept and practice. In other words, by identifying citizens we are able to see who does not belong. This exclusionary potential is extremely problematic. Of course, there are advantages to identifying the legally enforceable rights and responsibilities that come with membership of a political community and we need to acknowledge the negative potential of excluding

others. That negative potential may be mitigated by consideration of affective matters. The identities that are an essential part of citizenship allow us to recognise the intersections between the private and the public; the local, national, transnational and global; and the vital importance of gender, sexuality, ethnicity and social class. It also allows us to see the creative and positive (and other) tensions that exist in citizenship. It is not a matter of finding one simple definition but in recognising the essential ideas, issues and processes of citizenship. The drive towards participation is fundamental to citizenship. This does not mean that those who do not participate as much as others are somehow less of a citizen. Any suggestion that there is a simple trade-off between meeting responsibilities in order to gain rights would be detrimental to a democratic society as it would mean that exclusion would be imposed on all those who have one or more aspects of their lives that are disadvantageous in contemporary society.

And the nature and purpose of citizenship education needs to be clearly characterised. This is not a matter of simply identifying the 'best' approach. Rather it is promoting consideration of whether we are focusing on individuals as well as groups, exploring engagement in communities and what core values are being practised. An education that emerges from a neo-liberal perspective is very different from that which emphasises civic republican or communitarian perspectives.

My suggestion is that citizenship education is principally about helping people to understand contemporary society and to develop the capacity – the skills and dispositions – to take part in ways that enhance the possibility of the achievement of social justice. That version of social justice is one that is not based on Benthamite utilitarianism in which the greatest happiness of the greatest number is

targeted; nor is it based on a freedom-based approach that values either libertarian or a theoretically informed Rawlsian veil of ignorance in which we are able to stand outside society as we make judgments about it. Rather, there is a need to identify what is worth having. We need to consider a framework in which we can reflexively explore and embrace what is right.

#### - Clarity about 'location'

We need to be clear about who is doing citizenship education and for whom. I have placed inverted commas around the word 'location' in order to emphasise that we need to be clear not only about place but also about the ideas and practices that are associated with a range of contexts. Schools are obviously the main place in which professional forms of education can occur. But communities (local, national and global) are also highly significant. And these references to communities as well as schools raise questions about the age at which people are deemed eligible for education. My own position is that it is possible to educate the very young and the very old, to do so both formally and informally and to operate across the different characterisations of citizenship that I have referred to above and thus including perspectives about status, identity and action. This is of course a highly significant challenge as the boundaries between the private and public, the professional and the personal and the school and the community are real. It is not at all straightforward for teachers to add to an already very demanding schedule to contribute to the sort of work currently undertaken by youth and community workers. But I do believe that it would be possible to go beyond the situation which exists in some countries in which a brief period of time is given over to the provision of information within a classroom about the political system. Much more can be done.

## What should be important in promoting citizenship education?

### - A Conceptually-based Citizenship Curriculum

In developing a curriculum for citizenship education, I believe it is important to emphasise a conceptual framework. Broadly, that framework should have 2 elements. Firstly, there should be attention to substantive concepts such as power, authority, justice, rights, responsibilities. In that way the teacher will be able to focus on the fundamental nature of citizenship. Secondly, there should be attention to procedural concepts. These essentially indicate the ways in which learning occurs, including, for example, respect for truth, rigorous use of evidence, understanding and demonstration of tolerance. I will write more in the section below about pedagogical matters which allow for the curriculum to be brought to life. But the conceptual framework itself focuses on the curriculum. In highlighting this conceptual framework, I would also like to emphasise the importance of ensuring a constructivist approach. Teachers are respected professionals. They have knowledge and skills that are essential. But they work with students to create knowledge. This is a proposal for engagement within a conceptual framework and not encouragement for an unfocused argument between and within groups of teachers and students.

### - A Pedagogy for Citizenship

In order to develop the conceptual framework of the curriculum that is referred to above, it is essential to focus directly and discretely, as well as in other ways, on contemporary issues and to do so in a way that is active. Of course, in order to understand the contemporary at times requires an historical and other perspectives. There may be a place for citizenship education to be developed in a range of school subjects and (as above) other contexts including the whole school and communities. But there is a good deal of research

and inspection evidence to suggest that teaching citizenship discretely raises the possibility of expert teachers engaging with students who immediately know the nature and purpose of the educational activity. It will not be enough to transfer information from teachers to students about constitutions and institutions. It is not enough to promote moral messages to individuals who are told to be more resilient, ambitious or committed. It is not enough to focus on current controversial issues and encourage an argument. Rather, the commitment to the curricular conceptual framework outlined above will allow for active consideration of powerful knowledge in the context of understanding, promoting and practising engagement. And to reflect on that work is essential. Assessment (not testing) and evaluation (in the form of research) are not unnecessary luxuries; they are essential elements that allow us to know what people understand and can do and help us develop educational work in an intelligent manner. In this way students will learn about, through and for citizenship.

### - Support for the Development of Citizenship Education

Citizenship educators deal with ideas issues and practices that are widely accepted as being highly significant. There are very few people who would not regard the fundamental purpose of education as being to help people understand and engage with contemporary democratic society. But, unfortunately, this recognition of high significance is matched by the reality of low status for citizenship education in schools. It is vitally important that citizenship education enjoys high status. This will involve some things that are very hard for those in education to achieve. The perception of politicians and the political process must be significantly enhanced if citizenship

educators are to have a real chance of doing good work. But there is much that can be done. Governments and international organisations already recognise the value of citizenship education. If policy statements were to be more explicit about the specific value of an explicit and professional form of citizenship education, much could be achieved. The ways in which citizenship education is organised depends very strongly on arrangements within individual countries, but there is also a vitally important international element. Collaboration within and across national borders is essential. Research is needed to inform and suggest what could be done. The relationship between research, policy and educational practice is highly complex, but, simply, we need to ensure that there is a solid knowledge base that will inform (not simplistically decide) what may be done. Professional associations play a vital role in forming and strengthening communities of educators. They can provide moral support as well as practical guidance for teaching, learning, assessing and evaluating.

### - Conclusion

I do not wish to suggest that the above five areas provide a simple and straightforward 'answer' to the question of what could be done to promote citizenship education. The field is far too complex and contested for that. But in the above I have tried, in the context of recognising the very good work that is done within and beyond Japan by teachers, academics and many others, to suggest what I think is needed in the continuing struggle to promote a form of education in which people are helped to understand and take part in the making of a better world.

Ian Davies  
(ian.davies@york.ac.uk)







## 日本におけるシティズンシップ教育の次のチャレンジは何か？

～J-CEF 設立から7年間の変化を手がかりに～



### 〈パネリスト〉

※五十音順

唐木清志さん (筑波大学, J-CEF 運営委員)

川口広美さん (広島大学, J-CEF 副代表)

小玉重夫さん (東京大学, J-CEF アドバイザー)

土肥潤也さん (NPO 法人わかものまち, J-CEF 運営委員)

古野香織さん (東京学芸大学大学院, J-CEF 副代表)

### 〈コーディネーター〉

古田雄一さん (大阪国際大学短期大学部, J-CEF 代表)

水山光春さん (京都橘大学, J-CEF アドバイザー)

### 〈事務局〉

川中大輔 (龍谷大学・シティズンシップ共育企画,  
J-CEF 運営委員・事務局長)

### -7年間の社会の変化、若者の変化

〈古田〉J-CEF ができたのは2013年の3月でした。そこから7年間で、シティズンシップ教育や主権者教育、市民の参加などをめぐる世の中の動きや意識がどう変わってきたかなど、振り返ってみたいと思います。

〈小玉〉おそらく2011年ぐらいからこのJ-CEFを作る話が動き始めていたと思いますが、当時は東日本大震災に加え、民主党政権下で「熟議」や「新しい公共」といったキーワードもあって、シティズンシップ待ったなしといった世の中の雰囲気があったと思います。世界的にも「新しい公共」や「第三の道」が、アメリカやイギリスなどで政策のメインストリームで、イギリスのクリック・レポートなどもその流れで出てきた背景があったと思います。

ただ、この7年間でかなり時代が変化して、今はSDGsやインクルーシブな社会の実現のように、新しい公共性をどう作るかよりは目の前の課題にどう向き合うかという方向に世の中の動きがシフトしていて、民主主義そのものは若干後景に退いている印象を持っています。

そのような状況の背景にある2つの点をお話したいのですが、1つは、この7年間で、リベラルデモクラシーの退却として位置づける視点です。吉田徹さんが『アフター・リベラル』(講談社、2020年)という本でも書かれているのですが、民主党政権が崩壊し

その後与野党が固定化して政権交代が起こらなくなる中で、世の中が民主主義や公共性みたいな話から遠くなっていった状況があるような気がします。安全保障法制のときの国会前のデモなどは確かに盛り上がりましたが、新しい公共を作るというよりは政権とどう対峙するかというようにシフトしていったように思います。国際的にもトランプ政権に代表されるようにポピュリズムの動きが強まって、民主主義とか公共性というよりも人々のニーズや課題の解決にどう応えるかが政治なのだ、という方向に大きく動く中で、リベラルデモクラシーが退却していった印象があります。

もう1つは、それにやや緊張関係を持つ動きとして、若者が政治的に主体化してきている状況があります。日本ではそれが18歳選挙権という形で動いていますし、世界的にもグレッタさんに代表されるように、若い世代が政治的に発言し、世論の主導権をとって行動するようになってきています。香港の民主化運動にもみられるように、民主主義を求める動きが若い人たちを中心に起こってきている状況が、この7年間で注目すべきもう1つの動きです。このような若者の政治的主体化に照らして、デモクラシーそのもののリ・デザインを考えていかないと、デモクラシーなんてどうでもよくて、課題を解決するためにより効率的な政府を作って、それに従うようなカッコつきの〈市民〉を作っていくような動きが強まっていく危険性もあると思います。

〈水山〉2016年のアメリカ大統領選挙の辺りで、日本では民主党政権も終わりました。同時にイギリスでブレグジットが可決されたのもちょうどその辺りでした。2016年から17年ぐらいにかけて、世界の民主主義のあり方や潮流に、若者たちの理想主義的なデモクラシー観からちょっと引いたような状況が生まれつつあるように思うのです。こうした大きな変化にどうJ-CEFが対応していくのかということも、同時に問われているような7年間だったのかなという感じがしています。

〈唐木〉昨日つくば市の市議会議員選挙と市長選挙だったのですが、今回も20代が数多く立候補していて、ずいぶん変わってきていると思っています。ここのところ、土肥さんや古野さんもそうなのですが、若い子が色々な所で活躍して社会や政治に出てきて目立つようになってきたというのは、僕は社会の一つの大きな動きかなと思います。LGBTの問題とかハンディキャップの問題、インクルーシブの問題とか、いろんな方が声を上げるようになってきたのも、最近の大きな動きだと思っています。いい方向に社会は動いてきているなというか、そういう人たちの声やっと届けられるような社会になってきたのかなと思います。

〈古田〉そうした若い人たちの変化や実態を、土肥さんや古野さんはどう捉えていますか？

## 日本におけるシティズンシップ教育の次のチャレンジは何か？ ～J-CEF 設立から7年間の変化を手がかりに～

〈土肥〉自分の研究で全国の子も議会や若者議会の調査をしていて、2015年以降でその数が急激に増えていることが明らかになっていて、子どもや若者参加が進んだと評価しています。しかし、アソシエーション的な活動はむしろ弱体化しているのではないかなという印象も持っています。例えば、市民活動とか若者の学生団体は僕の世代の時は割と活況期だったのですが、この2、3年うちのNPOでも学生スタッフが全然集まらない問題が起こっていますし、他の地域でも学生ボランティアが集まりにくくなっているという話を耳にします。個人でつまみ食いの色んな活動をやりながら、「キャリア」に重きを置いた動き方をしている学生が増えたように感じています。社会を変えていこうというよりは、インターンシップに行っただけで自分の能力を高めたり、業界分析をしたりとかいう動きになってきている印象があります。

〈古野〉私も同世代なので凄くわかるなあと考えていて。確かに若い人がSNS中心にインターネットのハッシュタグデモなどで盛り上がる場面もここ数年で増えてきた印象もあります。ただ、私たちの世代って、情報が多すぎるわけですね。SNSも色んなものを使っていて、情報がものすごいスピードで流れていくのが当たり前で、流れてきたものをそのまま見て、声の大きい人達が賛同しているから「いいね」と賛同するような動き方になっているのではないかなと思います。高校生と話していても、「なんでそれを支持するの？」と聞くと、良くも悪くもイデオロギーベースではないというか、検察庁法でもBlack Lives MatterでもMe Too運動でも、トレンドが上がって話題になっているから私も賛同しようみたいな。LGBTや性教育の動きってというのは、そういうのが生まれやすいのだと思います。そう考えると、あらゆるものが瞬間風速的に流れていってしまい、その時には強く関心があったとしても、次の日にはもう別の問題に関心が移ってしまったりして。また、都市部で声を上げて活動している子達がフォーカスされたり新聞に挙げられたりすることが多いと思うのですが、そういう経験が出てない人のほうが多いかもしれませんし、そういう子たちに何ができるかを考えなければいけないと思っています。そういうものを、オンラインの取り組

みも含めてどうやって作っていかれるか、意識したいなと思っています。

〈川口〉私は九州で生まれて広島で大学に出てという人生だったので、比較的地方でずっと育ってきたという認識が自分の中であるわけですけど、古野さんの発言にはうなずくところも多いです。学生とくにSNSを活用したハッシュタグの社会参加や政治参加の話をして、どう？って聞いたら、殆どやらない子も結構います。一方で、SNSで社会参加や政治参加の情報を得て元気になっている子達もいますが、地方の大学だと周りに少ないだけに浮いてしまう傾向もあるように感じています。地方と都市部のギャップをどう捉えていくかも課題だと思います。

### -学校教育はどう変わらうのか

〈小玉〉この7年間のJ-CEFの成果や蓄積として、18歳選挙権の実現とそれに伴う主権者教育の整備という、教育政策のメインストリームの中の一つに政治的なアクターとして登場したことは大きいと思います。主権者教育の副教材の作成協力者に黒崎洋介さん、杉浦真理さん、原田謙介さん、林大介さんたちがJ-CEF関係者では携わっています。J-CEFのクロストークで副教材の執筆メンバーに聞くという企画もしましたね。問題は、実際の学校がどこまで変わったのかだと思います。地方に行けば行くほど、教育委員会の規制が強く、従来型の学校文化や教員文化が支配していて、カリキュラム・イノベーションが充分進んでいない状況はあると思います。そこを考えると、教科教育系の先生と、市民活動の方が共存しているのがJ-CEFの強みだと思うのですが、まだ教科教育の業界や従来のカリキュラムの中で考える枠から、パラダイム自体が抜けきれていないように思います。カリキュラム・イノベーションをするのか、それとも既存の教科の枠の中でやるのか、というせめぎあいが続いていて、そこを越えないと前に進まないのではないのかなと思います。

〈水山〉私がずっと関心を持っているイギリスのシティズンシップ教育は、2000年くらいから2010年くらいまでがちょうど高揚期だったのですが、この10年間は盛り下がっているようです。そういう20年間の動き

をみると、最初の頃、つまり高揚しているうちは良いですが、それが下火になっていく時期ってというのは、「方法論」が見えないですね。これからシティズンシップ教育はもっと未来があるみたいなお話もありましたが、私はある意味ちょっと心配していて、イギリスと同じ轍を踏まなければいけないという感じがしています。

〈唐木〉僕も共感する部分があります。以前は僕は社会科を壊す派だったのですが、今は立場が変わって社会科を守る派になっており、小玉先生がおっしゃるようなカリキュラムそのものを変えるというところからすると逆の立ち位置にいるのかなと思う一方で、でも教科は変わっていくものかなとも思っています。学校指導要領が相変わらずコンテンツで作られているので、もう少し「見方・考え方」やリテラシーといった方向でカリキュラムを作っていくか、いつまでたっても教科の間が繋がりが統合が図られないため、このコンテンツというところを変えていくことは大いに必要だと思います。

〈川口〉私は教科教育学を主領域としていますが、学会でも既存の教科の枠組みでは社会の声に十分応えられていないのではないかなという声もあります。私の中では、学校教育全体がシティズンシップ育成を目標としては掲げているので、既存の教科のあり方に対する問題意識はあります。ただ一方で、家族を含め、周辺に教員が多い環境なのですが、今後の教科のあり方なんて考える余裕が全くないように思います。検討する機会もないし、教員の内部からあまり感じる事が少ないのだと思います。もちろんJ-CEFにいられている先生方は、そういうのを求めて来る先生方が多いと思うので、そうした意欲ある先生達を繋げていくことで見せていくようなことが一つなのかなと思います。

〈小玉〉社会と学校が乖離している状況をどう繋ぐかっていうところがカリキュラムイノベーションを考える上での課題となると思います。その際に、学校がハブになって、市民社会で色々なことをやっている人達をコーディネートしていくような方向性で学校と社会を繋ぐことが必要だと思います。土肥さんがやっているようなまちづくりの動



## 日本におけるシティズンシップ教育の次のチャレンジは何か？ ～J-CEF 設立から 7 年間の変化を手がかりに～

きとか、川中さんがやっているような市民ボランティアの活動とか、そういうものを、学校ともしっかり繋いでいくようなコーディネーター的な機能を、教師なり学校なりが果たせるような状況を探っていくことができないかと思っています。

〈唐木〉その通りだと思うのですが、学習指導要領があって教科書があってという、高い学校文化の壁が、外から入りづらくしているようにも思います。アメリカなどではそれが相対的に弱いので、NPO が開発した様々なプログラムをどんどん導入する動きもあって、面白い授業も生まれてくるのですよね。学校教育制度が本当に硬直化していて、指導要領があって教科書があって受験があるというのは圧倒的に強力で、やっぱり社会から入ってくるルートを広げていかないと、風穴は開かないのではないかという気はしますけどね。

〈古田〉その意味では、むしろ学校以外の場所のほうが伸びやかに色んなことができる可能性があるとも考えられますが、土肥さんなどはどうみえていますか？

〈土肥〉中高生の放課後の集まる場所の運営や、学校外の中高生のまちづくり参加のプログラムや若者議会・若者会議のお手伝いをしていると、限られた若者たちだけしかアクセスできない、関わるができないというのは常に問題意識としてあります。例えば居場所施設であれば（もちろん場所によりませんが）居場所がない比較的しんどい若者達が集まりやすくなりますし、逆にまちづくりスクールや若者議会のようなアクティブな印象があるものと、学校でもバリバリ生徒会をやっていたりコミュニケーション能力が高かったりする子たちが来るというのはよくあることです。学校に行くとな面白いですよね。色んな子たちがいて、基本講師でいったとしても生徒は「こいつだれ？」状態ですから、話し手側の力量によって話を聞いてくれないこともあるし、ほぐしていく時間がより必要だと思ったりもします。単発ではなく、中長期スパンで学校に入っていく連携をしたり、いろんなやり方を考えさせられますね。

〈古野〉私も 2016 年以降、主権者教育の出

前授業などで、2 コマだけ全学年にお願いしますというような依頼がものすごく増えました。外部団体として学校教育に関われることにやりがいを感じる一方で、学年末の空いた時間だけパッとお願いされるような、いわば“都合よく利用しあう関係”で終わっているのだろうか…という疑問があります。特に高等学校では主権者教育の実施率は高まったものの、結局イベント的な主権者教育から抜け出すことができていないように感じます。学校の外にいる人間として、どうやって学校教育に中長期的に関われるかということですね。しんどい思いを抱えている子たちって、学校の中に結構いて、そういうときに別の軸で評価してくれる外部の人が学校の中に 1 人いるとか、たまに来てくれるだけですごく救われる生徒もいるのだろうなという風にも思っています。

〈唐木〉東京ボランティア・市民活動センター (TVAC) の市民学習コーディネーターの研修育成に 3 年間関わっているのですが、それは要するに学校と地域を繋ぐコーディネーターを作るってことですね。そういう人材をどのように育成するかを真面目に考えないと、絵にかいた餅に終わって、市民学習も推進できないということです。僕には、J-CEF はそういうコーディネーターを発掘するような組織にも見えていて。学校と社会を繋ぐコーディネーターのところ非常に日本は弱いと思っています。僕はアメリカくらいしか知らないけど、確かにそういう人達はいて、教員の力にも限界はあるし地域の人達にも限界があって、その真ん中にある中間組織みたいな人が絶対必要で、そういう人が J-CEF に集まってくる人達の中にいっぱいいると感じているわけです。そういう人達を育てたり発見したりする場みたいなものに J-CEF にはなって欲しいなという風に思っていますね。

〈水山〉今の話はすごく大事だと思う一方、先ほどの古野さんのお話との関連が気になります。古野さんのお話は、学校に関わろうと思っても、関わった側はもうひとつ実感が得られないという内容でした。私は長い間、環境教育に関わってきたのですが、在野の環境教育関係者は皆、そう言うのです。そのことの大きな理由の一つに、「カリキュラムが

開かれていない」ということがあるのではないのでしょうか。だから、カリキュラム上の利用したい部分にだけスポット的に外部の人に来てもらうことになり、逆にゲストは自分が学校教育の中で果たしている役割をカリキュラムの全体像の中で掴めないのだと思います。お互いが共有できるようなカリキュラムになって、それをコーディネーターも知っていて、ゲストも教員も共有している、そうなれば私はもっと内部と外部が良い関係でカリキュラムを作れると思います。そういう面でのカリキュラム・イノベーションをやる必要があるのではないかなと思います。

〈古野〉日本の場合、色んな目的が有り過ぎるというのもあるかもしれません。最近スウェーデンの教師の友人とイベントをすることもありますが、スウェーデンはその点すごくシンプルで、民主主義、多様性、平等などを国として、学校教育として大事にしています。だから目的も共有しやすいようにも思います。

### - 新しいアソシエーションの形

〈小玉〉J-CEF ができる背景に「新しい公共」という考え方があるという話を先ほどしましたが、これは、行政が公共性を全部独占するという意味での公共性ではなくて、行政と個人との間に存在する多様な NPO や町内会、学校といった中間団体が 1 つのアソシエーションとして横で繋がって公共性をつくるという考え方です。これが、J-CEF 立ち上げの時の 1 つの中心的な理念だったと思います。

ただ、その後、社会学者のアンソニー・ギデンズが「コスモポリタン・オーバーロード」という言い方をしていることとも繋がるのですが、インターネットや情報環境の著しい変化によって、携帯 1 個持つと、個人と全世界が生で繋がれて、いちいち NPO とか共同体に属さなくても世界と関われるような社会になっているので、その意味では既存の団体とかアソシエーションが立ち行かなくなっているというのは確かにそうだなと思いつながりながら伺っていました。一方で、新しいタイプのアソシエーションが出てきている可能性もあって、デジタルやインターネット、SNS を媒介にした人の繋がりがあってと思

## 日本におけるシティズンシップ教育の次のチャレンジは何か？ ～J-CEF 設立から 7 年間の変化を手がかりに～

ます。だから、今後の J-CEF とか、民主主義の担い手としてのアソシエーションのリ・デザインを考えていくには、デジタル化した新しい社会における新しいアソシエーションの持ち方みたいなことを、若者の政治的主体化と絡めて考えていくことができないかという問題意識があります。

J-CEF が取り組んでいる高校生ソーシャルデザインスクールの動きは、コロナ禍でネット上でしか皆が会えなくなったがゆえに、逆に可能になったというか、地理的には遠く離れている人同士が瞬時に zoom で会をもてて、緩く繋がっていると思うのです。そういう新しいアソシエーションみたいなものをどんどん開拓していけると、それこそ水山さんがおっしゃるような方法論を、J-CEF で出していく一つの実践例として進みつつあるのかなって見えています。

〈古野〉高校生ソーシャルデザインスクールは、現在のところ完全オンラインで進めていることもあり、首都圏だけでなく、地方、さらに海外から参加してくれている高校生もいます。それに、例えば一人の子がこれをやりたいんだよねと提案すると、それに刺激されて、ああ私も調べてみようみたいになっていて、面白いなと思っています。多分それぞれの子は、教室でこういう話が友達とできるかって言うとなかなかしにくかったり恥ずかしかったりもすると思うのですが、大学生メンバーのサポートもあって「この場だったら自分の考えを言ってもいいかな」みたいな、不思議な安心感みたいなものを作れているところもあります。一度も実際に会ったことはないのに、高校生同士で議論が盛り上がっている様子を見ると、新たな可能性を感じますね。

### - イ・リベラルデモクラシーとの対峙

〈川中〉今日の座談会の冒頭で小玉先生や水山先生から、リベラルデモクラシーの危機を迎えているのではないかと、デモクラシーそのものがお払い箱に入れられていないかという問題提起がありました。私も同感です。近年の風潮は大雑把に捉えてみれば、「もう今の社会は待った無しなんだ」という強い危機感のもと、「もっと成果の出る活動をしっかりやらないといけない」「たらたらと／ちまちまと活動している場合ではない」というメ

ッセージが明に暗に出されておられ、それ故に「問題解決」ということが非常に強く言われているのではないかと考えています。例えば市民活動の世界では事業化は当然のこととして、最近ではソーシャルインパクトがキーワードの一つになっており、社会的インパクト測定の実装化を求める動きも出てきています。また、政治の世界でも「スピード感」が強調されています。

そうしたインパクト重視やスピード感重視の展開に相容れないものの一つは熟議でしょう。以前「決められない政治」という批判がありましたが、敢えて言えば「すぐに決めない政治」の持つ価値が軽んじられているとも言えます。仮にそうだとすれば、私たちが考えなければならないことは二つあるのではないのでしょうか。一つ目は、危機感やスピード感を希求する世の流れと、教育や民主主義の「遅さ」をどう調停していくのかということです。もう一つは、この間の流れの中で、選挙が良くも悪くも利用されていることの問題と正対することです。集計的民主主義が幅をきかせており、選挙で民意を勝ち取ったら何をしても良いという空気が市民の間にも漂っている。この風潮のもとで選挙に重みを置くシティズンシップ教育に光を当てすぎると、その意図せざる結果として集計的民主主義が幅をきかすことを下支えする可能性もあります。市民が社会や政治に関わる時に、プロセスで生み出されるものに意味や価値があるのだということをどう強く打ち出すかが問われているのではないのでしょうか。

こうした点から考えた時、土肥さんが焼津でされているまちづくりの取組は興味深く捉えられると思っています。土肥さんは最近、私設図書館を設けられて、人々が集まってくる場をつくられているのですが、これはシャッター商店街の問題を直接に解決する活動ではありません。しかし、この場づくりのプロセスではソーシャルキャピタルや市民間の連帯意識が醸成されていたり、それまでは交わることのなかった人同士の距離を近づけ、社会としてのまとまりが作りだされていたりしています。つまり、民主主義の土壌を耕す営みが進んでいると考えられます。問題解決という軸だけではなく、連帯性の強化といった他の観点から成果を捉えていく見方や軸を明らかとし、そこから市民が

社会と関わる意味を提起していく教育や活動がこれからのシティズンシップ教育の流れに一層組み込まれていくべきではないでしょうか。イ・リベラルデモクラシーに結びつきかねない部分を見極めて、どのようなところで／どのような方法でリベラルなデモクラシーに揺戻していくのか。このことを J-CEF で取り組んでいけると良いかと思っていますが、いかがでしょうか。

〈土肥〉分からない方もいると思うので簡単に説明すると、今僕は静岡県焼津市の駅前通り商店街の空き店舗を借りて「みんなの図書館さんかく」を開設しており、行政に頼らない民間図書館の社会実験をやっています。家賃と水道光熱費など諸々で月 5 万ぐらいは必要になり、それを稼ぐために、一棚一棚の本棚に好きな本を置きたい人を募集し、集まった 40 人くらいの方が月々のオーナー料を支払うことによって、黒字の図書館経営を実現しています。さらに、この一箱本棚オーナーと呼ばれる人々には、「お店番する権利」もついていて、こうした参画型の図書館が注目されています。利用する人は無料で使えて、気付いたら人と人が繋がったり、まちの情報が集まったりと、いわばコモンズが生まれやすい場をつくっていくということだと思っています。そういう場所がより必要だと感じています。この辺りが一つシティズンシップ教育の中でもポイントになってくるのではないかと考えています。あとは、ユースセンターを同じ商店街の中で運営していたのですが、若者にとっては居心地よい場でも、そこに普通の大人が来るのは障壁があり、子ども・若者と地域のおじさんやおばさんが交じり合うのはうまくいきませんでした。でも、この図書館では、元々編集者をやっていた近所のおばさんに、高校生の図書委員の子がクラスでどんな本を置けばいいか相談するような対話が、日常的に起こるんです。しかも、図書館の中では選挙の話など、政治対話が行われる場所にもなっています。ハーバースが言うところのカフェやサロンみたいな感じかもしれませんが、これからの地方にそういう場所をどうやって増やしていくかは重要なことだと考えています。

〈小玉〉政治教育とかシティズンシップ教育には、肉食系と草食系の流れがあって、政局



日本におけるシティズンシップ教育の次のチャレンジは何か？  
～J-CEF 設立から7年間の変化を手がかりに～

とかが好きで、世の中に打って出て天下を取ってやりたいみたいな、天下を取りたい人たちのシティズンシップ教育が肉食系で、別にそんなこと自分は全然やりたいとも思わないけれども、ここにいることが自分にとってのもう一つの可能性というかも一つの居場所、そこでの関係性や気づきを大切にしたいというのが草食系ですね。僕はどちらもおもしろいと思いますが、どちらかというと、後者の草食系の市民を育てるようなところに、J-CEFの強みがあるのかなと思います。出口を決めないで、皆で草食系でまったりやっていることの中で、思考と熟成がなされ、デモクラティックに物事が決まってくるといことですね。土肥さんの言っていたコモنزは、まさにそういうことで、アソシエーションを新しい形にリニューアルしていく時の中心概念になると思います。自分にとってどうかっていうよりも、そこで皆がいるから何か楽しくてとりあえずやるという。高校生ソーシャルデザインスクールも、新しい形のコモنزみたいなものに今後なりうる可能性があると思いましたので、そういう方向でデモクラシーを再定義、再起動させていくようなことに絡んでいけるような方向性がこれから出てくるといいかなと思いました。

「開かれた「フォーラム」を目指して

(川口) 私がはじめて参加したときにJ-CEFに感じた魅力は、色んな人たちと対話しようとしていることです。中でも、形式が出来上がっているのではなくて、色々なことを試行錯誤されている。対話の仕方自体も非常に工夫されているというのが印象です。高校生の発表であっても、変に大人が見守ってあげる雰囲気ではなくて、本気で質問されている様子も見て、すごく重要だなと思いました。また、研究大会を2年させていただいても思いましたが、プロセスを重視する雰囲気がすごく大事ですし、それこそカフェとかコモنزの話もあったと思うのですが、それ自体が多分J-CEFの財産だと思います。一方でそういう対話や熟議からこぼれてしまう人の存在や、そういう議論が好きの人達だけが集まってしまう、こぼれ落ちてしまう何かがあるということは、少し危惧をしている部分もあります。このプロセスにおいて何を大事にしているのかとか、どのように対話をしていけばいいかということ自体を共有し

ていく必要があるのかなと。対話ができる人だけ付いてきて、できない人はうちにはフィットしないので、というのは、繋げるとい役割を考えると少し暴力的だなとも思ったりもします。今日の議論の中で、コーディネーターの育成や、学校と社会を繋いでいけるシステムの話も出ましたが、それに向けて、どのような対話が良いのかとか、指標やプロセス自体を皆で考えていく場っていうのも、J-CEFで取り組んでいくことが重要なのかなと思いました。

(土肥) 今の川口さんの話を僕なりに回収すると、良くも悪くもJ-CEFの集まりは、人によってはちょっとハイソな感じがするみたいなのはあるのではないかなと思っています。そもそもフォーラムって言葉自体がすごい公共性を帯びているっていうか、広場や公園のような意味があると思うので、これはJ-CEF以外の色々なプラットフォームでも課題になっていることだと思いますが、色々な人が出入りできるような場をどう作っていくかということ、引き続き考えていかなくははいけないと思いました。

(古野) J-CEF スタディ・スタヂオの運営では、コロナの中で8回ぐらいオンラインのミーティングもできましたし、高校生ソーシャルデザインスクールも毎週ミーティングを今して、運営委員以外の学生や社会人の方々にも助けていただいて、いわば共助として成り立っているというか、そういう方々が「一緒にじゃあ私やりますよ」とか「今度私次企画しますよ」みたいなものがほんとに自然とこの一年間増え続けてくる中で、できるようになってきたのかなあって、それ自体が、この企画続けられている事自体が、フォーラムというものを、企画を成り立たせられていること自体が、市民性というか、皆さんそういうものを発起されて色々作ってくださったのかなあという風にも思っています。川口先生の話と繋げて言えば、何か企画が自然と立ち上がってくる組織にしていきたいと思っているので、そういった中では今後の展望として、オンラインコミュニティのようなものも発展させていきたいですし、それを考えるのがある意味私の役目でもあるかなとも思っています。

(古田) J-CEFが「フォーラム」という名前を冠しているながら、本当にフォーラム足りえているのだろうかとか、あるいはフォーラムとは何なのかっていうことを、立ち止まって考える機会にもなったように感じました。普段どうしても私自身もJ-CEFでは目の前の課題解決を追いかけがちなのですが、立ち止まって世の中の動きや歩みを見ていく中で、少し引いた視点から考える機会をいただいたように思います。何か結論が出たわけではないですが、これから考えていく材料や宿題を、個人としてもJ-CEFの組織としても色々見つかったのかなと思っているので、ぜひこれからの議論に活かしていければと思います。

(川中) J-CEF 設立準備会の中で、フォーラムという言葉に掲げた際、「広場」のイメージを示しました。多様な人々がそこで交差して少し滞在し、その後はそれぞれの場所にまた戻っていくような広場。そこでは、何かを披露したい人はパフォーマンスをみせるし、対話や議論をしたい人はスピーチやディスカッションするし、ただただそこに居るだけという人もいます。主義主張や生き方は異なるけれども色々な人が一所に、ある時はいるという感じです。

ただし、そうした広場で対話がすぐに成り立つのかといえば、そうではない。ズレが生じてしまう。ズレが生じる場合は居心地が良くないことも珍しくありません。しかし、このズレを楽しむということをJ-CEFは大切にしてきたと私は思っています。鶴見俊輔が「ディスコミュニケーション」という造語を示したとき、それは決してコミュニケーションの反対にあるものではないと述べています。そこには思考の跳躍をもたらす可能性が孕まれていると鶴見は言うわけです。J-CEFという広場でのコミュニケーションにおいては、ズレの中から思考が飛び跳ねていく場面がこれまでもありましたし、これからも大切にしていきたいものです。

今日の座談会でもズレつつ重なりつつの対話が繰り返されたかと思われ。その中で、これからどういう方向に活動の翼を広げていくべきか、いくつかの示唆をお示しいただきました。みなさんと一緒に考えを深めて具体化していきたいと思っておりますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

日本におけるシティズンシップ教育の次のチャレンジは何か？  
～J-CEF 設立から7年間の変化を手がかりに～

座談会企画 補助資料

～ J-CEF のあゆみ ～

2013年

- 3月 設立記念シンポジウム「シティズンシップ教育が拓く未来とは？」
- 9月 クロストーク vol.1「参院選の総括から『若者の政治参加』を考える～3年後に向けて私たちは何をすべきなのか？～」

※その他の主な取り組み：ニュースレター発行(創刊号)、各種部会開催など

2014年

- 3月 第1回シティズンシップ教育ミーティング  
全体会テーマ：「今求められるシティズンシップとは何か？」
- 5~6月 クロストーク vol.2「海外視察合同報告会～欧米の動きから日本の磨きどころを考える～」
- 7月 「シティズンシップ教育の社会的成果指標に関する勉強会」
- 10月 クロストーク vol.3「若者のボランティア活動と政治参画に関連を考える」

※その他の主な取り組み：ニュースレター発行(vol.2~5)、各種部会開催など

2015年

- 3月 ・クロストーク vol.4「地方自治をどう教えるか？」  
・第2回シティズンシップ教育ミーティング  
全体会テーマ：「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」  
・「シティズンシップ教育で創る学校の未来」(東洋館出版社)刊行
- 8月 ダイアログ・キャンプ vol.1「学校での主権者教育を巡る現場での不安や懸念、払拭するには？」
- 9月 ダイアログ・キャンプ vol.2「中高生のプロジェクト型学習の支援、どのように進めていけば良いのか？」
- 12月 クロストーク vol.5「執筆メンバーにさく！主権者教育の副教材をどう活用するか？」

※その他のハイライト：スタディ・スタヂオ KOBE スタヂオ発足、「第10回マニフェスト大賞」「最優秀シティズンシップ推進賞」受賞  
※その他の主な取り組み：ニュースレター発行(vol.6~8)、各種部会開催など

2016年

- 3月 第3回シティズンシップ教育ミーティング  
全体会テーマ：「いま、改めて『民主主義』を学ぶとは？」「学校で政治を教えるとは？」

※その他のハイライト：スタディ・スタヂオ KYOTO スタヂオ、TOKYO スタヂオ発足  
※その他の主な取り組み：スタディ・スタヂオ開催、ニュースレター発行(vol.9~11)、各種部会開催など

2017年

- 1月 クロストーク vol.6「シティズンシップ教育の先駆的実践のカタチとは？」
- 1~2月 第1回人材養成講座「地域/社会や政治に参加する市民が育つ学びをどうデザインするか？」(西日本会場、東日本会場)
- 3月 第3回シティズンシップ教育ミーティング  
全体会テーマ：「シティズンシップ教育で育む『市民』とは？」
- 6月 クロストーク vol.7「新科目『公共』で高校生は何を学べるのか？」
- 9月 第2回人材養成講座「『主権者教育』の新たなカタチをどうつくりだしていくか？」

※その他の主な取り組み：スタディ・スタヂオ開催、ニュースレター発行(vol.12~13)、各種部会開催など

2018年

- 3月 第4回シティズンシップ教育ミーティング  
全体会テーマ：「想像力のスイッチをどう起動させるか？-『ポスト真実』の情報環境下におけるシティズンシップ教育を考える-」
- 6月 クロストーク vol.8「スウェーデンに学ぶ若者の社会参加」
- 8月 人材養成講座「出前授業での深い学びをつくりだす力を磨こう！」(西日本会場)
- 9~11月 人材養成講座(東日本会場)  
テーマ：「シティズンシップ教育に基づく新しい学校づくり・授業づくり」/「学校とシティズンシップ教育 部活動から考える」/「家庭とシティズンシップ教育～個人の人生から考えよう～」/「特別支援とシティズンシップ教育」

※その他の主な取り組み：スタディ・スタヂオ開催、ニュースレター発行(vol.14~16)、各種部会開催など

2019年

- 1月 人材養成講座(東日本会場)(続き)  
テーマ：「地方自治とシティズンシップ教育-あなたの街から考える-」
- 3月 第5回シティズンシップ教育ミーティング  
全体会テーマ：「社会や政治への『参加のバリエーション』を増やす」
- 8月 シティズンシップ教育研究大会 2019  
シンポジウムテーマ：「シティズンシップ教育研究の語られ方、語り方」

※その他のハイライト：スタディ・スタヂオ TOKYO 再始動  
※その他の主な取り組み：スタディ・スタヂオ開催、ニュースレター発行(vol.17~18)、各種部会開催など

2020年

- 3月 第6回シティズンシップ教育ミーティング
- 6月 高校生ソーシャルデザインスクール vol.1
- 8月 スタディ・スタヂオ瀬戸内スタヂオ「『社会参加』を推進する主権者教育とは!？」
- 10月 シティズンシップ教育研究大会 2020  
シンポジウムテーマ：「オルタナティブな視点からシティズンシップ教育研究を見直そう」

※その他の主な取り組み：スタディ・スタヂオ開催(オンライン)、ニュースレター発行(vol.19)、各種部会開催など





### 感染症を学校でどう教えるか —コロナ禍の学びを育む社会科授業プラン

杉浦真理、池田考司 (編)

出版社：明石書店 / 2020年出版 ISBN：978-4-7503-5134-6 134頁

コロナ禍が教育現場にも広がる中、子どもたちが感染症と向き合い、対処していくための教育・授業を考える。歴史学、保健医療学、教育学、貧困政策の専門家の論考による第1部と、学校で感染症の教育・授業を行う授業プランを提供する第2部で構成。



### 子どものための哲学教育ハンドブック 世界で広がる探究学習

M.R. グレゴリー / J. ヘインズ / K. ムリス (編),  
小玉重夫 (監修), 豊田光世・田中伸・田端健人 (訳者代表)

出版社：東京大学出版会 / 2020年出版 ISBN：978-4-13-051356-2 383頁

子どもたちの主体的な探究を育む教育実践の最先端を、理念と手法の両面から展望する。日本でもよりいっそう「対話」「思考」「探究」などの価値が重視されるなか、人として生きるうえで重要な「考える力」の育成という、世界的な教育の目標実現のための手引きとなる。



### 現代アメリカ貧困地域の市民性教育改革 —教室・学校・地域の連関の創造—

古田雄一 (著)

出版社：東信堂 / 2021年出版 ISBN：978-4-7989-1673-6 298頁

アメリカの都市部にある貧困地域の子どもが、市民性形成のための教育から「排除」されている構造的課題を指摘。そこからの脱却を目指した教育改革の諸相を明らかにし、日本の教育実践・教育政策にも重要な示唆を与える。



### 米国社会科成立期におけるシティズンシップ教育の変容 —社会科の誕生をめぐる包摂と排除、両義性—

斉藤仁一朗 (著)

出版社：風間書房 / 2021年出版 ISBN：978-4-7599-2358-2 384頁

20世紀初頭の米国においてなぜ社会科が成立したのか。教科誕生の過程に注目し、市民を育てる教育が抱える包摂や排除の論理を描き出す。



## 終刊のあいさつ

川中大輔 (日本シティズンシップ教育フォーラム事務局長)

今号で『J-CEF NEWS』は20号の節目を迎えることとなりました。この節目にあたって、当会がどのようなメディアを制作し、会内外に発信していくのかを検討することとなり、その結果、今号をもって本誌は終刊することを決定いたしました。この間、ご執筆いただいた皆様方とご愛読いただいた皆様方にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。ありがとうございました。終刊にあたりまして、第1号から第19号までのバックナンバーの目次を以下に掲載すると共に、今後当会ウェブサイトにて内容を公開する準備を進めてまいります。

当会は設立から8年目を迎えるとしておりますが、この間も情報発信の手段や手法は大きく変わり続けています。この度のコロナ禍がもたらした試練の中で、その変化は大きく

加速したことは改めて言うまでもないことです。こうした環境変化に即しつつ、当会は今後もシティズンシップ教育の実践／研究が境界線を越えて交差／結合していく場を設けてまいります。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。



## J-CEF NEWS

### バックナンバー目次

第1号 判型・ページ数：A4版10ページ

- ◎掲載記事
  - ・リレーエッセイ  
「市民の歴史」を編む / 川中大輔(シティズンシップ共育企画代表)
  - ・実践事例紹介  
兵庫県立兵庫高等学校「創造基礎」の取り組み～授業の枠を越え、地域で活動する生徒たち～ / 大前吉史(兵庫県立兵庫高等学校教諭)
  - ・書評 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)  
『社会を変えるには』小堀英二著
  - ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」  
「無知な市民」の可能性 / 小玉重夫(東京大学大学院教育学研究科教授)  
シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？ / 若槻健(関西大学文学部准教授)
  - ・活動報告

第2号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎掲載記事
  - ・リレーエッセイ  
点を打つこと、繋ぐこと / 黒崎洋介(神奈川県立湘南台高等学校教諭)
  - ・実践事例紹介  
「まちつくクラブ in 湘南」の取り組み  
～学校を越えて、ともにまちをつくる高校生の活動～ / 名城可奈子(湘南まちつくプロジェクト)  
：編集長の目 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
  - ・書評 / 長沼豊(学習院大学文学部教育学部教授)  
『シティズンシップの教育思想』小玉重夫著  
『シティズン・リテラシー—社会をよりよくするために私たちにできること』鈴木崇弘ほか編著
  - ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」  
社会の構造的な問題への意識付けと、組織的行動の必要性 / 伊藤章(NPO 法人国際学生ボランティア協会理事)  
何のための「シティズンシップ教育」？—シティズンシップと社会デザイン / 中村陽一(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授)

\* 肩書きは掲載時のもの



## 第3号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - 「私」と「社会」の関係性を紡ぐ  
/ 木村充(東京大学大学院学際情報学府博士課程、一般社団法人広島国際青少年協会少年事業副委員長)
- ・実践事例紹介
  - 未来の有権者が生の政治を身近に感じる「未成年“模擬”選挙」～日本における取り組みの意義と課題～  
/ 林大介(模擬選挙推進ネットワーク事務局長、東洋大学社会学部助教)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・書評 / 西川正(NPO法人ハンスオン！埼玉常務理事)
  - 『道はみんなのもの』クルーサ著、モニカ・ドベルト絵  
『遊ぶ』が勝ち―『ホモ・ルーデンス』で、君も跳べ！』為末大著
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」シティズンシップ教育の実践者へ伝えたい、政治に触れる“場”作りと必要な要素  
/ 原田謙介(NPO法人 YouthCreate 代表理事)  
学校教育におけるシティズンシップ教育がめざすもの  
/ 水山光春(京都教育大学教育学部教授)

## 第4号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - わたしのシティズンシップ教育体験  
/ 神野有希(一般社団法人コアプラス)
- ・実践事例紹介
  - 自治を拓く無作為抽出による市民討論会  
～市民参加を通じての社会教育の意義と展望～  
/ 吉田純夫(NPO法人市民討論会推進ネットワーク代表理事、NPO法人みたか市民協働ネットワーク理事)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・書評 / 古賀桃子(NPO法人ふくおかNPOセンター代表)
  - 『福祉国家へのアプローチ』大塚桂著  
『井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法』井上ひさし著 いわさきちひろ著
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」誰もが参加できる民主主義社会をめざすには  
/ 北山夕華(ブスケルド・ヴェストフォールド大学客員研究員)  
学校内外においてシティズンシップを養う重層的な網の目作りを！  
/ 若林勇太(公益財団法人さっぽろ女性青少年活動協会札幌市若者支援総合センター指導員)

## 第5号 判型・ページ数：A4版16ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - 集合は、議員面会所で  
/ 宮崎一徳(参議院事務局)
- ・実践事例紹介
  - 地域と協働する学校による地域をつくる教育  
/ 若本悠(島根県隠岐島前高等学校高校魅力化コーディネーター)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・書評 / 古田雄一(筑波大学大学院博士後期課程)
  - 『民主主義を学習する―教育・生涯学習・シティズンシップ』ガート・ピースタ著  
『地域を変える高校生たち―市民とのフォーラムからボランティア、まちづくりへ』宮下与兵衛編、宮下与兵衛・栗又衛・波岡知朗著
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」「見知らぬ者たち」へのエンパシー  
/ 阿部潔(関西学院大学社会学部教授)
- ・セミナーレポート
  - J-CEFクロストーク vol.3「若者のボランティア活動と政治参画の関連を考える」  
/ 西尾雄志(日本財団学生ボランティアセンターセンター長、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員准教授)、福島宏希(United Youth 代表)、伊藤章(NPO法人国際学生ボランティア協会理事)

## 第6号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - Lさんへ～阪神・淡路大震災から20年の年に  
/ 実吉威(認定NPO法人市民活動センター神戸、公益財団法人ひょうごコミュニティ財団)
- ・実践事例紹介
  - 市政に関わる手応えを感じ、育つ取り組み  
/ 芝原浩美(NPO法人ユースビジョン事務局長)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・書評 / 湯浅雄偉(NPO法人コミュニティワーク研究実践センター月形事業所職員)
  - 『支援のフィールドワーク - 開発と福祉の現場から -』小國和子、亀井伸孝、飯嶋秀治編著  
『自閉症連続体の時代』立岩真也著
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」〇〇教育を超えて、教育のベースにシティズンシップの育成を～「ESDの10年」とユネスコ世界会議の成果から～  
/ 村上千里(認定NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議理事・事務局長)  
デモクラシー概念の変容とシティズンシップ教育  
/ 笹井宏益(国立教育政策研究所生涯学習政策研究部部長)

## 第7号 判型・ページ数：A4版16ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - 「私」と「社会」の関係性を紡ぐ  
/ 土肥潤也(NPO法人 Rights 理事、YEC(若者エンパワメント委員会))
- ・実践事例紹介
  - 模擬請願を通して、地域の願いを届けるトレーニング  
/ 杉浦真理(立命館宇治高等学校教諭)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・書評 / 村松灯さん(東京大学大学院教育学研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員 DC)
  - 『教育システムと社会―その理論的検討』広田照幸・宮寺兎夫編  
『責任と判断』ハンナ・アレント著、ジェローム・コーン編
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」シティズンシップを育むリフレクションを考える  
/ 市川亨子(明治学院大学ボランティアセンターコーディネーター)  
生徒会活動が切り拓くシティズンシップ教育の新たな可能性  
～生徒会活動支援協会の挑戦～  
/ 西野偉彦(一般社団法人生徒会活動支援協会代表理事)

## 第8号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - 18歳選挙権実現。次の一手をどうするか  
/ 森野宇宙(中央大学)
- ・実践事例紹介
  - 若者が社会への影響力を高める実践～スウェーデンの高校の学生自治会の取り組み～  
/ 両角達平(ストックホルム大学国際比較教育学修士課程)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・書評 / 辻智子(北海道大学教育学研究院教育社会発展論分野准教授)
  - 『「育休世代」のジレンマ - 女性活用はなぜ失敗するのか? -』中野円佳著  
『水俣から福岡へ - 公害の経験を共有する -』山田真著
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」学校づくりへの参加からはじまるシティズンシップ教育～三者協議会の取り組み～  
/ 上田秀庵(早稲田大学教育学部)  
当事者の地域参加と新たな公共圏域の再編成  
/ 向井健(松本大学総合経営学部専任講師)

## 第9号 判型・ページ数：A4版16ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - 市民になることから始める  
/ 東大地(学生団体 ivote 関西)
- ・実践事例紹介
  - 静岡市人材養成塾の取り組み  
/ 松下光恵(NPO法人男女共同参画フォーラムしずおか代表理事)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・書評 / 佐藤正則(めいと日本語学院)
  - 『相互文化的能力を育む外国語教育』マイケル・バイラム著  
『ことばの市民』になる』細川英雄著
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」日本、海外、学校教育、地域におけるグローバルシティズンシップ教育  
/ 山根和代(立命館大学国際関係学部准教授)  
「多文化共生」にむけて、主権者教育が問われていること  
/ 野崎志帆(甲南女子大学文学部准教授)

## 第10号 判型・ページ数：A4版12ページ / 発行部数：300部

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - 教育者こそ現場に足を運んでほしい！  
/ 東末真紀(神戸大学学生ボランティア支援室)
- ・実践事例紹介
  - 社会と自分をつなぐ授業  
～中学校における「グローバルシティズンシップ科」の取り組みから～  
/ 松倉紗野香(埼玉県上尾市立東中学校教諭)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・書評 / 山口洋典(立命館大学共通教育推進機構准教授)
  - 『質問』田中未知著  
『たった一つを変えるだけ』ダン・ロスティン、ルース・サンタナ著
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」良き市民としての自己実現に向けたシティズンシップ教育の取り組み  
/ 川口英一(前神奈川県立湘南台高等学校校長、学校法人鶴嶺学園理事)

## 第11号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - 地元の活性化を目指して  
/ 岩田祥喜郎(玉野商業高等学校)
- ・実践事例紹介
  - 市民性の育成をめざすアクティブ・ラーニング型道徳授業の提案  
～豊かな「対話」と「活動」で深める道徳性～  
/ 中義則(花園大学教授)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・特集「18歳選挙権」初の参院選をふりかえる」外部との連携とともに爆発的に広がった主権者教育と今後の課題  
/ 原田謙介(NPO法人 YouthCreate 代表理事)  
主権者教育の成果と課題～「政治的中立性」を取り巻く現状  
/ 林大介(東洋大学社会学部助教、模擬選挙推進ネットワーク事務局長)：J-CEF スタディ・スタチオ KOBE vol.14  
「選挙戦を終えて考える、主権者教育の成果と課題とは？」で交わされた意見

## 第12号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - シティズンシップとは自らが社会を作っているんだという自覚と疑いを持ち、必要であつたらかえていく。そのために行動する。  
/ 田中光(桜美林大学牧田ゼミ選挙プロジェクト)
- ・実践事例紹介
  - 子ども・若者とよのなか(社会)をつなぎ、シティズンシップ(主権者意識)を育む活動を通して  
/ 超智大貴(NPO法人 NEXT CONEXION 代表理事)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・新連載「ヨーロッパの動きから考える」分断社会におけるシティズンシップとは  
/ 両角達平
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」「社会的包摂」の視点を持って多様な価値観に触れる場づくりを  
/ 齋藤実央(教育ファシリテーター)  
労働者から市民へ～教員・大人の自由時間のための社会像の教育を～  
/ 片田孫朝日(灘中学校・高等学校教諭)

## 第13号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - シティズンシップと生徒会活動  
/ 小原淳一(大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程)
- ・実践事例紹介
  - 楽しく！面白く！～シティズンシップ教育定着へ向けた「ど・あっぷ！」の活動～  
/ 馬場政彰(NPO法人ど・あっぷ！代表理事)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」道徳教育は「市民」の育成にいかにか寄与できるか  
/ 荒木寿友(立命館大学大学院教職研究科准教授)
- ・推薦図書「学生・院生に薦める5冊」  
/ 古田雄一(大阪国際大学短期大学部専任講師)  
/ 斎藤仁一郎(東海大学課程資格教育センター助教)
- ・連載「ヨーロッパの動きから考える」スウェーデン若者協議会に学ぶ、若者が社会に影響を与える方法  
/ 両角達平

## 第14号 判型・ページ数：A4版12ページ

- ◎ 掲載記事
- ・リレーエッセイ
  - 「ポスト・模擬選挙」へ～主権者教育 = 模擬選挙でいいの？～  
/ 古野香織(中央大学法学部)
- ・実践事例紹介
  - 子ども達とともに立ち上げた「サギとの共生研究所」～「落とし所のない問題」に向き合った半年間～  
/ 三浦一郎(姫路市立手柄小学校教諭)：編集長の日 / 水山光春(京都教育大学教育学部教授)
- ・特集「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にすべきか？」評価からみたシティズンシップ教育  
/ 河原亮亮(広島大学大学院教育学研究科博士課程後期)
- ・連載「ヨーロッパの動きから考える」スウェーデンの学習サークルにみるシティズンシップ教育  
/ 両角達平(NPO法人 Rights 理事)
- ・推薦図書「教員に薦める5冊」  
/ 黒崎洋介(神奈川県立瀬谷西高等学校教諭)  
/ 杉浦真理(立命館宇治中学・高等学校教諭)
- ・書評  
『子どものための主権者教育』中義則編著  
/ 古田雄一(大阪国際大学短期大学部専任講師)